
プロントファイター

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロントファイター

【Zコード】

Z5092C

【作者名】

高坂桐乃

【あらすじ】

プロントはギルドプロントファイターを立ち上げた。そこでは任務を受けおい。こなしてゆく。仲間としてIQ124のブルースとボク娘のリンを仲間にし、任務をすることになった。プロントたちはティンクを助ける任務につく……

第1話 テイinkを助ける、少ない時間【前編】（前書き）

もしかしたら50ページ田までに名探偵コナンのキャラクターの誰かが登場するかも……

第1話 ティンクを助ける、少ない時間【前編】

「ここは練習場。ティンクと言う妖精がここで悪いモンスターたちに襲われている。

ここでは岩で道がふさがれてて雑草が生い茂っている。

そのティンクを助ける事こそ我らプロントファイターの使命である

……

プロント「ティンクが捕らわれているのはここか

俺はプロント。プロントファイターのリーダーだ。

己の仕事とはティンクと言う妖精がスラッシュ軍に襲われているのを助けると言う仕事だ！

そしてブルースとリンを連れてやつてきたのだ。

ブルース「全方位にキラービー。3ターンでかたをつけて欲しいといわれているのに」

彼は冷静に考えている……

そして彼女はやる気満々だ。

リン「ボ、ボクら3人は4ターン以内にクリアしないと自衛隊に逮捕されてしまう。この任務の本当の恐ろしさだよ」

彼女は唯一の少女。武道家で蹴りや殴りが得意な奴だ。俺の仲間でも特に攻撃の力は強く怒らせたらヤバイな。

プロント「新技エレキも習得したし」

俺は実は電磁波魔法・エレキを習得するほどの電気魔法習得レベルまで来ている。
そして習得しているんだ。

ブルース「命中率100%」

彼は判断力が長けていて命中率とかも大切にしている。
しかし冷静すぎる事が大きい難点である。

リン「取り合図ボクらには雑魚なだけ。」

敵たちのいる場所からは俺らは凄く離れている。
敵たちは戦う準備をしており、ちが早く手をつけないと敵がティンクに攻撃してしまつ……。
なのでがんばって助けなきゃならない。

プロント「2ターン目までにスライムを倒せなきゃティンクを助けられない。」

俺は皆にこのティンクの体力を考えて呼びかけた。
ティンクの体力は5、スライムはティンクに3ダメージを与える。
皆もわかつたらしく……。

ブルース「良い手あり。プロントがこの位置でキラービーを弱られてそこに僕が矢で攻撃。そしてリンがあのキラービーを攻撃」

彼は初めのターンの行動をよく考えた。
ブルースはかなり知的は賢いからな……。
そして俺らに教えている。

ブロント「この方法は良さそうだ。2ターン目に俺とブルースがスライムに攻撃出来るぞ。でもブルースにも危険有りそう。」

俺はこの作戦は良いと思う。

他には作戦が考え付かない。

ブルースの考えたその作戦にしなきゃならない。

ブルース「他には方法が少ないんだ。余裕を持ち3ターンで死者なしで敵を全滅されるためには」

リン「ボクの技でキラービーを致命傷にしてあげるよ。」

ブロント「作成決行だあ」

第1話 テイঁンクを助ける、少ない時間【後編】

「うして作戦は成功した。

走って敵のところに追いつく戦法にする事にしよう。

俺らは皆で思いつき走っていた。

心臓はバクバクと音を鳴らし息も苦しい。

しかし彼女はそれ程疲れていないようだ……

リン「キラービー。オラオラオラ『氣功破』」

彼女は氣功破を出してキラービーに連續攻撃

キラービー B 「ぎやああああああああああああ

ブロント「やああああああああああああああ
キラービー B には致命傷のダメージだった。

キラービー A に俺は鉄の剣で攻撃した！

キラービーから体液がドロドロ出てきた。

それが草を腐らした。

ブルント「うえつ。きたねえ」

ブルース「リーダー。我慢しろ、僕がトドメをさすから」

ブルースは鉄の弓を引き矢を打った。

飛んではねてキラービーに矢で切り裂いた。

キラービーは消滅し粉が沢山飛び散った。

ブルント「ふつ、じうじう死に方するんだ。」

スラッシュユ「俺らの戦いはまだ終わってない。この妖精を攻撃だあ」

その事でブルント達は

ブルント「（しまったあ。1ターン目終了時刻だった。）」

そしてブルースは

ブルース「（攻撃の反撃が出来ない。僕は元から無理だけだな。）」

そしてリンは

リン「（きっとボクが襲われるんだあ。やばい）」

キラービー×3は全部ブルースに殺人針で攻撃したのであった。

ブルース「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア」

そしてスラッシュユは

スラッシュ「隙を見せるからだよ」

ブルース「怒つたぞー。僕の鉄の弓でスラッショウ。攻撃」

そしてスラッシュユは

『スラッシュ』『あまいな。俺レベル1だがお前ぐらいの攻撃はある』
粘液の厚盾』『

スラッシュはすごい守りでブルースの攻撃が歯が立たない。

プロント「俺の攻撃が本当の一撃だあ『Hレギ』」

このたては電氣に弱かつた。

敵軍リーダースラッシュを倒した。

しかしまだキラービー達は襲つてきた。

「ボクの一撃で殺してあげる」

キラービー × 1 死亡

プロント「ブルースを致命傷だ。」

グサツ グサツ

ブルースへ連続攻撃してきた

ブルース「ＨＰ1。敵はレベル2とレベル1。リンがレベル1なら1ターンで倒せる。猛すぐだ」

リン「一気にボクら。決めさせてもう1つ『氣孔波』」

リンのソウルの力がキラービーを襲つた。

キラービー「ぐつ。」

キラービーは倒れた。

ブロント「くつ。ＭＰも足りないな『サンダー』」

威力は極限までは無かつた・・・

そしてキラービーは耐え切つた。

ブルース「僕の』でトドメを刺す！」

ブルースは思いつきり鉄の弓で矢を打つた。

会心の一撃だ。

急所に当たた。

キラービーにはひとたまりも無く

ティンクも助けられた。

しかしブルースは衰弱して倒れてしまった。

第2話 ブルースの目覚め

寒い。

僕死んだんだ。

何故か暖かいぞ。

たぶん天国だ

あれつ。 痛い。

ブルース「し、死んでないよ」

そしてプロントは

プロント「気がついたか。ブルース。」

そしてティンクは

ティンク「ブルースたん。助かつた。わーいわーい」

そしてリンは

リン「ボ、ボク。すゞく心配したんだからね。」

そしてプロントは

プロント「一週間一休みしようぜ。」

その頃任務上では。

ツドム「ククク。この回復の杖と投槍とハチマキを奪え。ゴブリンとスライム

ゴブリン「ガツテン。」

スライム「アリアアリサー」

そして夕陽は

夕陽「フツ。『レゲーライ。僕が相手しなくても大丈夫だ。』

そしてスライムは

スライム「この人殺すかな」

そして夕陽は

夕陽「ピュースル。このスライムから守れ」

ピュースル「わかった。『ピュースルバリア』」

そしてスライムは

スライム「僕の獲物だああー。『粘液』」

夕陽「粘液ねえ。子供だねえ。」

そしてスライムは

スライル「本名はスライルだよ。この人は僕の獲物」

そして夕陽は

夕陽「このスライム。致命傷に近い状況まで弱く攻撃」

ピュースルの攻撃は強かつた。

すぐ致命傷に近い状況になつたスライルだった。

夕陽「このアクラの書『上級』をスライルにやる。リーダーになれ。
わかったか。この涼宮夕陽様の命令だぞ」

そしてスライルは

スライル「了解。」

その頃ツドムは

ツドム「目的。コンピューター。この草原で休みに行く

そして夕陽は

夕陽「お前らは逃がしてやる。しかし逃げないなら死んでもいいつで。
良いな」

そしてツドムは

ツドム「ものす」こ靈氣が感じる。一引いた方がいい。引き受け
よう

そしてツドムは逃げていった。

第3話 任務挑戦 スライル覚醒

プロント「Dランク任務のコレにしようかな」

そしてブルースは

ブルース「Cランク任務もあるぞ」

そして夕陽が現れた。

夕陽「この草原でオーガーがこの場所の秘宝を3つ奪つたらしい。
Cランク任務 オーガー退治をやつて欲しいんだけど」

そしてプロントは

プロント「依頼された任務。こなしてみせる!」

プロント「この任務。コレをクリアできれば大量の依頼金が手に入
るんだ」

そしてティンクは

ティンク「私の装備、私の装備」

そしてブルースは

ブルース「この家宝の力を使ってでも任務はやる」

リンは

リン「ボク達、プロントファイターだもんね」

4人合わせてプロントファイター。草原へ向かつた。

スライル「馬鹿ツドム。俺様が止めに行く」

そしてツドムは

ツドム「魔王軍第一軍のリーダー。ツドム様に何を言つんだ。お前は殆どただのスライムだぞ」

そしてスライルは

スライル「お前なんて馬鹿で鈍闇で弱い駄目駄目リーダーだよ。俺様こそ本当のリーダーだ『水竜大爆破』」

ツドムはこの攻撃を危機一髪でかわした。

ツドム「助かつたあ……」

スライル「ツドムの宝玉よこせ。そうしたら食い止めに行く」

そしてツドムは

ツドム「魔王様からもらつた宝玉だよ。コレは渡せないな」

そしてスライルは

スライル「仕方ない・・良からづ。かわりのお前のバトルアクスと

アクアバトルアクスに改造してやるからな」

バトルアクスはアクアバトルアクス（水竜突撃が出来る効果があるバトルアクス。威力も強い）に変化した。

スライル「いつてくるよ。僕は貴方の手下だ。」

第4話 スライルとの戦い

リン「テンミリオン小説があすきてミッションも起動だと両方消滅するから小説達が20の後過去ログに行くという仕組みになつているんだよ。」

リンは雑学をプロント達に言つた。

そしてスライルが現れた。

スライル「僕はスライル。友達のスラッシュを痛みつけたお前達を殺す！」

そしてリンは

リン「どうせスライムじやん。ボクらには負けるわけがない！」

そしてプロントとブルースは

プロント「俺らプロントファイターの力を見せてやる。」

ブルース「僕らはオーガー退治に来た。スラは雑魚だ！」

そしてスライルは飛び上がって襲つた。

スライル「ゆ・油断大敵だ『アクアトルネードマシンガン』！」

海の水が大量にトルネードになりマシンガンのようプロント達を襲う

ブロント「ヤヴァイ『エレキ』」

そしてブルースは

ブルース「すごい守りだ『水壁』」

スライル「あの少女様からもらつた武器だつて天罰を起さずしかない

そしてその頃夕陽は

夕陽「（あの少女様からもらつた武器だつて天罰を起さずしかない
な）『ダークネスフレアメテオ』」

そしてスライルは

スライル「トドメの一撃だ『アクアマダン・・・・・・・』」

スライルはすぐ高温の闇の隙間に押し潰された。

ブロント「やつたぞ」

そしてブルースは

ブルース「すごい。誰がやつたんだ。」

そしてガイ・ガーダは

ガーダ「私だ（別名誰だし）」

そしてブルースは

ブルース「あの人があつてくれたんだ。

」

すぐ勘違いしているスライルだつた。

スライル「おのれー。この本は燃え尽きたし。僕の技でツドム軍の
リーダーになつてやる。」

第5話 プロンとファイターズVSツドム

そしてブルースたちはガイ・ガーダを逃がしてオーガーを倒しに行つた。

ツドム「3人。それぞれ回復の杖。ハチマキ、投槍を守れ」

ゴブリン達はオー

プロント「行くぞー『エレキ』」

回復の杖を手に入れた。誰につけますか

そしてティンクは回復の杖装備

ブルース「僕こそ。強い『アクア』」

そして投槍を手に入れた。

リン「ボクはエビルスレイヤーのようにがんばる『氷孔破』」

そしてハチマキを手に入れた。

リン「やつたー」

ツドム「ツドム軍は最後の時をお前らを手下にするかだ。負ければ手下になる覚悟です。」

そしてプロントは

「プロント」「俺らが勝利すればツドム軍のボスが仲間。すごい事じゃ
ン『サンダー』」「

そして電撃の攻撃がツドムを襲う

スラッシュユ「ツドム軍には僕もいるんだ」

スラッシュユは電撃それ程効かなかつた。

スラッシュユ「僕の体に入っているゴムの力で威力も守りもパワーア
ップだ。」

そしてリンは痛かつた。

リン「仕方ない『又龍』」

リンの氣の力から青い龍と赤い龍が出てきて交じり合いスラッシュユ
を襲う

スラッシュユ「僕は退却」

そしてスラッシュユが逃げた。

ツドム「俺には勝てない！」

そしてプロントは

「プロント」全力で行くぜ『エレキ』」「

そしてブルースは

ブルース「矢よりも『アクア』」

そしてリンは

リン「一気に行きりをつける『巨大虎大突撃』」

そしてティンクは

ティンク「この技はどうかなあ『ファイア』」

そしてツドムは負けた。

仲間にして悪さを告白させて任務が終了した。

しかしリンは3日間寝たきりと言つ結果となつた。

第6話 シルバーランスツドム軍の噂（前書き）

新しい章です。

物語はまだ序盤ですが……

番外編なんだけどね……

第6話 シルバーランスツドム軍の尊

ダークライズ「くつ。俺でもこの任務は難しい。Bランク任務つて少し如何様だと思つ」

ダークライズはBランク任務のシルバーランスツドム軍退治をビリしても倒せず逃げ出したらしい。

シャーサク「フツ。ダークライズさんもダメか・・・」

そしてプロント達が入ってきた。

プロント「今日は任務少ないぞ。Dランク任務を2つやるつ

リン「C無し。Bはシルバーランスツドム軍ねえ。ボク達はD2つだけじゃ少し物足りないかも」

そしてツドムは

ツドム「Bランク任務。人権違反だよ。俺の名前を軍に使うなんて許可は下りていない。俺の軍は無くなりプロント様へ忠誠誓つたし」

そしてブルースは

ブルース「今日はAクラス任務が多いよ多い。」

そしてプロント達は一つのDランク任務へ向かつた。

* * *

プロント「ねじさんへ芋の掘り手伝いが一つ田の仕事だわ。」

そしてブルースは

ブルース「簡単。」

そして仕事をした。

報酬は18エルドだった。

ツドム「猛一つか野生のキラーベーの毛を手に入れろか。簡単だぜ」

報酬は48エルドだった。

そしてプロントは

プロント「食事も出来ん。」のロクラス任務。
事とは。トホホ

そしてリンは

リン「ボクたち。」のBランク任務やつてみよつと頼金5000
エルド。すごいお金だぞ

そしてプロントは

プロント「俺。その任務やばい気がするんだ」

* * *

そして戻ってきた。

スウェン「俺の飯ウェンボルヒーと言つグループ。仲間が死に僕も任務に就けないほどの大怪我したんだよ。Aランク任務を何回もこなしている実力あるのに……」

この任務を挑戦した人12人がボロボロだつた。

リン「ボクらがこの任務するしかない」

そしてツドムは

ツドム「俺の名前を使う奴はあのスライルの野郎ぐらいしかいない。元部下の奴だ。」

そしてシャーサクは

シャーサク「悪口も言つスライムだからな。僕も仲間として戦おつ」

そしてブルースは

ブルース「シャーサクさんつてす、」そうだと思つていたんだよ

そしてジャガージュン市と言つ都市へ向かつた。

第6話 シルバーランスッドム軍の尊（後書き）

ジャンプスーパースターーズと言つゲームソフトのキャラクターっぽい言葉もあるかもしません……

第7話 シルバー・ランスツドム軍との戦い

ここはジャガージュン市。そこへあぐの悪者シルバー・ランスツドム軍が襲ってきたのだ。

スライル「銀時、カズキ。僕ら3人シルバー・ランスツドム軍がこの町を滅ぼす事にした」

こいつはスライル。シルバー・ランスツドム軍のリーダーだ。

銀時「やれやれ」

こいつは坂田銀時。シルバーな奴で怒る事多し

カズキ「遊戯とは違うんだ。サンライトの力で滅ぼしてやる。滅する」

スライル「フフ。滅ぼす為に技を使うぞ」

スライル「フフ。『アクアトルネード・マシンガン・スラッシュ・シャー』」

この技は上級水技の中でも特に上の威力を持つ技だ。

ハマー「この町を守れない」

そしてハマーは死んだ。

銀時「銀の魂の力を持つ俺は最高だ』月臨遂』「

すごい力が銀色になりすごい威力がジャガージュン市を切り裂く

カズキ「これでどうだ』サンライトクラッシャー』」

ドッカーン

スライル「これでトドメだ』アクアマダンテ地獄絵図』」

ジャガージュン市は廃墟となつた。

ブロント「これまでだシルバーランスツドム軍。俺らブロントファイターが倒す。」

ツドム「俺はツドムだ。名前を奪つのは人権違反だぞ」

そしてスライルは

スライル「俺様はこの雑魚オーガーと戦う。お前ら2人は他の奴らを倒せ」

そして銀時は

銀時「わかりました。」

カズキもわかつたらしい。

スライル「フフフ『アクアブレス』」

そしてツドムは

ツドム「オレはな、土属性中級技をがんばって留得してやつたぜ」
スライル「土は水に弱いのに土覚えるのか。やはりツドム軍は俺様
がリーダーだな。」

そしてツドムは

ツドム「お前を倒す『クエイラ』」

地面が割れてスライルを襲う。

スライル「空を飛ぶぞ『クオーターバリア飛び』」

スライルを守っている水が空を飛んだ。

スライル「これでボロボロだぞ『水漬』」

ツドムを水が大量の圧力で包み漬す。

ツドム「防御技も使えるぞ『アースバリア』」

そしてスライルは

スライル「コレで今度こそ死んだな。『水竜大暴走大爆破』」

そしてツドムは

ツドム「ぐつ。まだまだ『アースヒール』」

その頃他の奴らたちは

プロント「」の技で『サンダー』

そしてカズキは

カズキ「」の槍でこんな雑魚技ぐらい受け流してくれるわ」

そしてこのサンダーは無効となつた。

ブルース - いけえ - アイス

氷が銀時を襲う

銀時「寒いあやあ-----」

そこにシャー・サクが現れた。

シヤーサケー絶対ブルースとマゼンダは結婚して子供を産むんだ。
某店関係小説の話だよ!!!!『赤イミ』

シャーサクの手に靈気の手刀が出来て攻撃力が大幅に上がった。
それがカズキを切り裂く……

第7話 シルバーランスツドム軍との戦い（後書き）

この戦いは続きます。

第2章シルバーランスツドム軍の噂は次で終わります。

第8話 戦いの終結……

そしてカズキは

カズキ「この靈気はやばいな。早めに潰す『フルパワーサンライトクラッシュヤー』！」

そしてシャーサクは

シャーサク「ぐつ。結構効いた。『ドラー・シャ & ピュースル召喚』」

ドラー・シャ「このカズキって野郎殺しますか。」

ピュースル「ご主人さま。カズキを殺します。」

そしてカズキは

カズキ「ドラー・シャ？、ピュースル？。こいつらって雑魚だろうな。」

カズキはその龍と蛇の神・ドラー・シャと合金と宇宙の神・ピュースルを見くびつた。

ピュースル「風技を少し使ってあげましょつ『エアロマガーア』！」

そしてカズキは

カズキ「これってあの超上級魔法か！」

そしてピュースルは

ピュースル「ただの中級魔法だよ。」

カズキは超上級レベルの威力だと思った。

そして

ドラー・シャ「火炎をやつてやる『ファイアーマグナムショート』」

そしてカズキは燃えきった。

銀時「シャーサクとやらは最高級の靈氣を持っている。交渉しかない」

シャーサク「銀時を倒すよ『光の棘』」

そして銀時は結構ダメージを受けた。

シャーサク「残りは4人で戦つておけ」

* * *

ツドム「やべえ『アースシユガ』」

そしてスライルは

スライル「『アクアメチルバリア』」

そしてこの攻撃は100倍でツドムに返ってきた。

そしてシャーサクが現れた。

シャーサク「コレで復活させてあげましょう『ザオリクアレイズ』
ツド』

ツドムは復活した。

シャーサク「スライル。お前は逃げる。そして世界の平和にするためにがんばれ」

＊
＊
＊

銀時「俺には技が無いじゃないか……」

そしてブロントファイターのメンバーの攻撃連続で銀時はおびえて逃げ出した。

ブロント「任務成功だな」

モードシードは

ツドム「スライルは反省してくれたし」

そしてシャーサクは

シヤーサク「予想どおり。」

そして元の場所に戻るうとした。

ティンク「私だつて経験値つみたい。」

ブロント「ダメだ。早くもとの場所に戻らなきや」

第8話 戦いの終結……（後書き）

次回作 1・2ページで口常編
その後第三章バジルとの出会い。ティンクの心境で行きたいと思
います。

第9話 繁華街での出来事（前書き）

バジルとの出会い。ティンクの心境の物語の序章に過ぎない。
プロントファイターでは色々な任務があるがこの話は任務での帰り
の話

第9話 繁華街での出来事

俺らは任務を終了した。

ティンクが経験値を得たいが我慢した。
しかし、繁華街が近くにあり、ティンクがどうしてもと言つたから
仕方なく、その繁華街へ経ちよつた。

それがその大事件の発展だともしらずに……

ティンク「この人形欲しい。プロント買って。」

俺らは繁華街の有る店の前に来た。

ティンクは人形がかなり素敵に思い、それが欲しかつたようだ……

プロント「ダメだ。お金の無駄だ。」

俺にはお金はあまりない。

この任務が終わり、ギルドへ戻れば大量の報酬を貰え、かえるけど。

人形欲しいティンクをよそに仕方なく行つた。

ティンク「プロント。知らないつー」

そしてティンクはプロントから走り、離れた。

ティンクはこの繁華街で近くにいる人にぶつかつてしまつた。

ティンク「『』めんなさい」

バジル「いいよ、いいよ。貴方は可愛いみたいだし、この人形でも

買つてあげよ。」

ティンク「有難う。貴方つて良い人みたい。プロントさんとは違つて」

バジル「お前と一緒にこの塔に行きたいんだけど。ギリギリまで攻撃してトドメはお前に刺す。どうだ」

ティンク「知らない人についていくのはよくない」

バジル「経験値をかなり得る事が出来る方法だよ。レベルアップすれば欲しい物いっぱい買えるし、仲間も喜ぶと思つよ」

ティンク「やつたー。ついてく、ついてく

ティンクはバジルと呼ばれる少年についていった。
それがワナとは知らずに……

第9話 繁華街での出来事（後書き）

ナルトの波の国とかデュアン・サークとかシフトアップネットのト
ンミリオンとかパクつているといふもあるがこれからもよろしくお
願いします。

第10話 塔の門……（前書き）

人気が無いかもしれないが人気を増やす為に頑張っています。

第10話 塔の門……

ティインクはバジルと呼ばれる少年へついていった。
北にある塔にやつてきた。

バジル「門番。通るよ」

バジルはあの門番とはかなりの友好を結んでいた……

門番「わかつた。」

バジル「それと、他の人が塔に通らせてとか言つたら全力でとめて
ください。」

門番はバジルのいう事を熱心に聞いている。

私とバジルは塔へ向かった。

* * *

その頃俺達は

ティインクを探して歩いていると一つの手紙が落ちてあつた。

ブロント「ある人どこかに行つてきます。財宝も手に入れ強くな
つて帰つてきます。【ティインクより】」

ティインクの手紙のようだつた。

だが、やな予感がしてならない。

ブルース「こうこう事は騙されていると想つ」

リン「ボクらは仲間じゃない。それなのに1人だけ行くのは良くない」

ティインクだけではなく、シャーサクさんもいなくなっていた。

ツドム「ティインクとシャーサクがいない。」

俺の考えた事。ティインクを探すならあそこに塔の門番がいる。その人ならば近くでティインクを見ていたかもしれない……

プロント「門番さんに聞くか」

俺らは塔の門番がいる所に歩いていった……

プロント「ここへ銀髪の戦士と妖精の女の子が通りませんでしたか。」

門番「あそこへ銀髪の戦士と妖精の女の子さんが一緒に歩いていたと思つた」

プロント「ありがと」。

俺はその門を通りつとした時、突然……門番さんは俺らに槍を突き出した。

ブルース「なんだ……」

門番「お前ら、この塔へ入るなら処刑してやるぞ……」

この門番はかなり怒つているようだ。

この状況からして門番を倒さない限り、この先に行く事は出来ない

とこ'うわけか。

なうば、この方法しかない！――！

第11話 門番との戦い（前書き）

僕の作品の中で一番の出来かもしない。

第1-1話 門番との戦い

俺らはその門番と戦闘するしかないと言つわけだ。
それが答えだ。

ブロンスト「うおおおおおおお

俺は鉄の剣で相手へ攻撃。

相手の門番は攻撃をひらりとかわした。

門番は槍で俺に攻撃。服が少し荒く切れた。

リン「ボクの存在を忘れていたアルか。【相手よ、吹つ飛べ！】

『氣孔波』

リンは門番に氣で攻撃した。その氣で門番は吹つ飛んだ。

ブルース「威力90% 命中度85%」

ブルースは思いつきりを引き、威力重視の矢の一撃を放った。
敵は動けないという事は多分当たる。

当たった。急所には当たらなかつたがかなりのダメージを与える事が出来た。

ブロンスト「お前を殺すわけにもいかない。仮死状態になつてろ！」

俺は鉄の剣のみねで相手を攻撃し、氣絶させた。

そして俺らはその塔に入つていった……

* * *

その頃、私とバジルさんは塔の2階に来ていた。

バジル「ここからは少し危険だ

バジルさんが言った時にカサカサ……と言う音が聞こえた
こうしているとティンクとバジルのところに、ゴブリンバットが襲つ
てきた。

ゴブリンバット「ブヒブヒー」

そしてバジルは

バジル「ティンク、倒せるか

そしてティンクは

ティンク「火炎よ。このゴブリンを燃やせ『ファイアーボール』」

そしてゴブリンバットを1匹倒した。

バジル「眠りのブレスを吐いて来たぞ」

そしてティンクは

ティンク「風技は弱い技。でもブレスを弾き飛ばせるし、私の得意
分野だから……『Hアロラ』」

そしてゴブリンバットは簡単に死んだ。

バジル「お前。風属性が強いじゃん。そして経験値15たまつたぞ」

第1-2話 ゴブリンバット軍との戦い

グネゾーキオ「ククク。キャロルの血だけではタリン。他の少女の血も欲しい。」

そして『デビルラッシュ』『ラクル族』が来た。

ビルン「あたしのペット、グネゾーキオ。この世界を滅ぼすために好都合だ。」

そしてドルスは

ドルス「お、俺らって初登場じゃないか。テンミリオンお絵かきに発表されたい。」

そしてビルンは

ビルン「ゆんチームのボケデータにあたしは書いてもらつたよ。」

そしてティンクとバジルの話に戻る

* * *

ゴブリンバット「俺ら10匹。お前ら2匹。ゆうつ、有利」

バジル「一緒にがんばろ!」

バジルは少しあびえているが結構田をキラキラしてティンクへ言つた。

そして

ティンク「わ、わかつた…」

テイシクはやる気満々だった。

そしてバトルが始まつた！

テインケ - 私からしくなる - フリイバー

炎がエアリンハットを襲った。

1匹はまなま燃えて墜落した。

モード一ノンリニア

卷之三

セントラルのアドレスを吐いてきた。

ハシリ「これくらいしなら…」

そしてどんどん倒していく

ティンクが8匹倒したのにバジルが1匹しか倒せない。

もしかして剣の腕が無いかもしれない。

ティンク「風の技は弱いけど『ニアカッター』」

簡単にゴブリンバットを倒した。

ゴブリンバットを倒した。

バジル「す、じゅん。ティンクさん」

そしてティンクは

ティンク「レベル8つて嘘っぽく感じます。」

そしてバジルは

バジル「本当はレベル3で彼女がどうしても冒険したいという理由で守る為に戦士になりました。」

バジルはティンクに告白した。

そして

ティンク「わ、わかったわ」

第13話 塔の裏ルート 3体の魔物

ブロント「こ」の塔で裏ルートだつて

ブロントは裏ルートを見つけて驚いた。

そして

ブルース「やな感じするな。僕らは絶対ティインクを助けなきやならない！」

ブルースの判断力は正しかつた。
後でティインクがやばくなりそうだ。

ツドム「スライルが絡んでいるかも知れないな。」

そしてリンはルンルン氣分で答えた。

リン「でもボクらはこの道しかないんだ」

そしてモンスターが現れた。

ヘルコボルトとドーラゴンゾンビとダークゴブリンバットマンが襲つてきた。

ヘル「フフフ。地獄の力で倒してやる

ゾンビ「回復は苦手だが俺様はほぼ無敵だ」

ダークゴブリン「おい。」の場所では俺様が強いんだよ

ブルース「実は拾つて隠していたエクスボーションあるから投げる」

ドーラゴンゾンビの体にエクスボーションが染み出しどラゴンゾンビは死んだ。

ブロント「ヘルゴボルトよりもあつちだ『Hレキ』」

電撃がダークゴブリンバットを襲つた。

効果的中だ。

ブロント「飛行系は電撃系には弱い！」

そしてリンは

リン「ボクの新技だ『虎波』」

そしてヘルゴボルトは

ヘル「ぎゃあああああああああああああ」

そして

ブルース「ヘルゴボルト。死んでもいい『アクア』」

ヘルゴボルトにはあまり効いていない。

ツドム「とじめだ『アースシュガー』」

ヘルコボルト死亡

そして2人組が現れた。

ビルン「フフフ。あと少しでティンクはえさになる。フフフフフ

第14話 最終決戦 ゲネゾーキオとの戦い

ブロント「誰だ。お前達」

そうしてドルスは答えた。

ドルス「俺はドルスだ。ティンクは伝説の戦士だがすぐ倒せる。」

そしてビルンは

ビルン「フフフ。用意したモンスターは簡単には倒せない。ティンクを殺す作戦成功確立92パーセント。そして退散」

ビルンとドルスは逃げていった。

そしてこの先をブロント達は進み

見た映像は何か。

その頃バジルとティンクは

バジル「そもそもこここのボスが登場する頃だな」

そしてティンクは

ティンク「なんだろな」

そしてボスが現れた。

バジル「約束ビリツ女の方を用意した。キャロルを返せ」

そして

グネゾーキオ「この少女をもひつわ」

ここにはグネゾーキオ。蛇の怪物だった。

そしてティンクはグネゾーキオの尻尾に巻きつかれた。

プロント達がここに来た。

プロント「おい。この少女を放せ。俺たちの仲間だ」

そしてグネゾーキオは

グネゾーキオ「放せといわれて放す者はいない！」

そしてプロントは

プロント「正々堂々戦つか」

そして

リン「僕達はプロントファイターだからな

リンはルンルン気分ではなくなった。

ブルース「やっぱやうな気配だあ

ブロンスト「一気に倒すよ新技で『サンダーボール』」

電気のボールが生み出されてそれがグネゾーキオに放たれた。

そして

グネゾーキオ「ぎやああああ

ブルース「僕も行くぞ『アクアカッター』」

水の刃が生み出されてグネゾーキオを襲つた。

グネゾーキオ「ぐるるるるる

リン「ボクが最強だあ『双龍波』」

二つの龍の力がグネゾーキオを襲う。

グネゾーキオ「ならば『ミラクルバリア』」

バリアはほぼ意味無くグネゾーキオに大ダメージを与えた。

しかしリンは倒れた。

ツドム「コレは俺の技でしか倒せそうもないな『土封印解・アーケ
アースシュガー』」

そしてグネゾーキオを倒す事が出来た。

しかしつづムの土技はほぼ忘れて初級技までしか出来なくなつた：

バジル「キャロル、キャロル大丈夫か」

そしてキャロルは

キャロル「だ、大丈夫よ。1ヶ月ぐらい病院で休めば」

そしてバジルは

バジル「よかつた。助かつたよ。ブロント、ブルース、リン、ツド
ム」

そしてみんな喜んでティンクと一緒に街へ帰つて行つた。

第15話 新しい任務、それは（前書き）

オリジナルキャラクターとして首切り包丁を持つ男、桃木・斬が登場します。
スライル再登場。

第15話 新しい任務、それは

トイラーの町に戻った。

ブロント「久し振りの帰国だあ」

ブロントはたくましくなつて帰つてきた。
そして次の任務へ向かつた。

そして

ブルース「じランク任務 水の谷で橋を作つておにいちゃんを
護衛か。これぐらい楽勝だな」

そしてリンは

リン「ボク、やばそうな気がする」

ブロント「任務の前にはレストランで食事だぜえ」

そしてアウトレストランと呼ばれるレストランへ行つた。

シェフ「美味しい料理を作ります」

そして出来た。

ブロント「う、うまそー」

ブルース「僕も食べるぞ」

リン「ボクだつて食べる」

ツドム「俺だつて

ティンク「わたしもわたしも」

そして沢山食べ過ぎたかある

シユフ一代金は5066エルドです。

モードル・アーティ

ハロンエキスのねじ立て栓レバーハンドル

そして店から出た。

* * * * *

その頃、水の谷では

スタイル「ビルンさんがここを拠点にしてのつとれと言われた。口はチャンス。この国の長になろう。税金は22%にする」

そして町の人々は

町人A「税金高すぎ。この国と他の国をつなぐ橋は作らせないなんて酷い」

そしてスライルは

スライル「逆らう人はこの人の預かっているお金の5%を国に無理矢理送金だ」

そして町人Aは

町人A「そ、そんなー」

そしてスライルは

スライル「フフフ。この谷の途中の道に雇つた2人の人間を派遣しておくか」

そして謎の人間が現れた。

桃木・斬「ククク。ここにクル奴を倒したいのは山々だが2人の雑魚に任せせるか」

桃木・斬は首切り包丁を振り回して語った：

第15話 新しい任務、それは（後書き）

ブラックジャックによろしくの 小沢も登場しますよ

第1-6話 プロントファイター 水の谷へ

そしてプロントは「Cクラス任務を挑戦する事にした。

プロント「Aクラス任務を達成した俺ならCランク任務怖くない怖くない」

プロントは安心しきっていた。

しかし……おじさんは

おじさん「わるいねえ。Cクラスといつても難しいと思つかう。Bランク以上の戦いだから」

そしてプロントは

プロント「うそだろ。Cクラスじゃねえのか、おじさんは

おじさんは答えた。

おじさん「わしの国は超貧乏で大金すらお金を持っていない。わしは勿論持つてなくCランクぐらいまでしか払えないのさ」

ブルースはそのことを聞き、怒った。

ブルース「コレは普通の任務ではないと言つ事か。僕よりよくなつこう任務に行くからなあ。」

* * * * *

デューク「スライルさんのために」

そして猛一人は

リリア「イルミナ軍の魔法戦士のリリアース・ヘルムがスライルの
為にがんばるしかない」

リリアとデュークは待ち伏せ大作戦をしていた。

そしてブロント達は

ブロント「この道しかないか」

ブロントは考えた。

リン「仕方ない。ボク・・・・いや私たちはこの道行こり」

ボク娘のリンは水の谷のおじさんがいたので一人称を私って言った。
(何故)

そして

ブロント達は待ち伏せ軍と戦う事になってしまったのだ。

ブロント「俺ら、新技を習得したし」

そり、俺らはさうに強い魔法などを覚えたんだ...

第17話 水の谷での死闘。悪き人々

デューク「お手柔らかに」

リリア「いわすねつよ」

プロント「2人さつそく登場か」

フロントは敵軍を発見した。

蘭は一人は単一系がもう一人はノミナ量の雑用の「うなぎのを着ているようだ

デューク「奇襲攻撃だ『臥竜閃』！」

地面すれすれで真空波が俺を襲つた。

俺は体全体から血が出るほどの大怪我を負ってしまった。息も苦しく、痛さが耐えられないほど……

ブルース「ならば回復するか『ヒールブレス』」

ブルースは水の泡を全体に出現させる聖なる力の泡が沢山発生し俺を癒した。しかし殆ど無力だったが、少しは癒えたと思う。

「お手柔らかと言つて自分だけ強力な攻撃つて『巨大虎大突撃』」

〔巨大な虎が出現してテューケを襲う。〕

(テューケ) 「強い攻撃を無効にしてやり返してやる『鳳雛飛翔』」

虎は剣に簡単に消されてしまった。

そして

リンは切りつけられた。

プロントファイター (N o . 51)

日時 : 2006/02/21 17:07

名前 :

(リリア) 「イルミナ軍の手下。イルミナ兵達よ、あの金髪軍を倒せ」

リリアはイルミナ軍へ携帯電話で電話した。

イルミナ軍は兵士を10人派遣してきた。

「くつ。イルミナ軍かよ。やばいかもな」

「イルミナ軍って他の小説の世界に少し入っていいのか」

ブルースは真剣な顔でプロントへ言った。

プロントは怒つてテューケへ攻撃した！

「一気に終わらせてやる『サンダーボール』」

電撃の力が込められている丸い力が発生した。

そして

「あわせ技だな『アクアカッター』」

アクアカッターがサンダーボールに合わさりあい強力な力となつてデュードクを襲つた。

第1-8話 過激な戦い（前書き）

更新遅れ続けました。

更新スピードが遅いままなので注意

第1-8話 過激な戦い

ツドム「！」のイルミナ軍。お前のおさげ似合わないよ。！」のめがねを壊してやるつか」

ツドムはリリアに言いつけた。

リリア「ヒクスカリバー！」のオーガーを切り裂いてやる。まずは『ヒールブレス』！」

闇の泡が出現した。フワフワと飛んできてツドムに包み込み、持ち上げて落とした…

そして

ツドム「！」から落ちたときクッシュショーンが無いとやばいな。『アースジエール』！』

土がジエルになるツドムは助かった。その時デュークとブルボルリンは

デューク「この電気＆水のあわせ技はやっぱさがる… 僕の奥義で一気に決めさせてもらひー。『紅蓮天刃』！」

デュークは不安定で爆発しやすい小さい炎の玉を8個作りだしほぼ時間差無しでサンダー・ボール＆アクアカッターへ撃ち込んだ

そしてこの技は両方無効となつた。

5個のそういう爆弾がプロントとブルースを襲つた…

デューク「と、トドメだ。うん」

デュークは上空からプロントとブルースを一閃しようとした。
だが…

ティンク「戻つてきたよ『ファイアーボール』」

炎の玉がデュークを襲つた。

デューク「これぐらい安心、安心」

そしてティンクは後ろに回りこんだ。

ティンク「トドメだあ『エアサンダー』」

風のイナズマがデュークを襲つた。

そして

イルミナ兵「代わりに私がこのダメージを受け止めよう」

イルミナ兵10人の中の一人が守つたのだ。

第19話 シャーサクとスライルと小沢（おざわ）

その時スライルは

スライル「この水基本書を1000回読むと水魔法の威力が大幅に上がり伝説の技を一つ習得できるってあの少女から聞いたからな」

そしてシャーサクは

シャーサク「今日はウチはツーテール（らきすたのががみんの髪）で来たよーん、ウチは男だよーん。殺すよーん『ピースル召喚』」

そしてピースルにスライルはボロボロにされた。

でも助かった。

シャーサクはイルミナ軍を察知してそこへ向かつた。

スライル「だれだあ」

小沢「僕は小沢と申します。学校ではずっと眞面目に働き店では仕方なく万引きをするしか無く病院に釈放は苦労して野菜屋でライブドアの社長にしてもらつて小沢カンパニーにした小沢です。この町と貴方の雇用した人々を全て頂きます。」

小沢のせいで支配していたスライルの陣地を取られた。

スライル「ブラックジャックによろしく見ると良いよ

* * *

シャーサク「フツ、イルミナ軍の9人の皆さん。お前達の故郷を見つけました。エレンシア戦記の世界だろ。そこへワープしてもいい。『ガガーラー』」

謎のパワーでイルミナ軍の兵士9人は消えた。

リリア「あわわわわ。私の仲間達が全て消えた。」

そしてシャーサクは

シャーサク「お前は少しアリソンに関係あるがれつきとしたオリキヤラだ。助けてやろう。ただのオリキヤラ募集で取りこぼされた奴とかだらう。」

そしてシャーサクは観戦する事になった。

ブロント「やつたー。あとデューコークとリリアだけだあ『サンダーボール2連発』」

デューコークとリリアに致命傷のダメージ。

ツドム「1回だけなら・・・『地割れ』」

デューコークだけを飲み込んだ。

リリア「イルミナ軍の本当の力を見せてやるー。」

リリア「疲れたー」

リリアは逃げた。

第20話 桃木との戦い！！！

小沢「クツククク、桃木・斬よ襲つてやれ」

そして桃木・斬は

桃木・斬「デユーラとリリアを倒せるつわものか。どんな物か」

そして桃木・斬はプロントファイターの場所へ向かった。

その頃。プロントファイターは

おじや「リーダーのスライルは超酷くて逆らつといの人のお金を%
単位で盗む超酷い奴なんだよ」

そしてプロントは

プロント「酷いばかり言つているな馬鹿な奴だ」

そしておじやは

おじや「お前は超悪口人間だな。超弱そうだし超ダメそうだし」

プロントは言い返した。

プロント「お前、死ねや」

おじやは言い返した。

おじや「死ねを超多用に使うんぢやないぞ。少しごらい超嫌な事が
あつても馬鹿も超多用に使うんぢやないぞ少しごらい超嫌な事が
つても超を多用するなと言つ事だ」

そして

ブロンスト「俺の怒りマックスー。俺は全く超は言つてねえ」

おじやは

おじや「おまえ、超つて言つただらうが。やはり超を超多用してい
るんぢやないか俺と言つ言葉は超多用は良くないぞ。超悪いじやん。
僕つて超多用に言ひなさい。わかつたか。金髪。超悪そな顔の金
髪」

おじやは悪みを沢山言つた。

ブロンストは顔が赤くなつた。

ブロンスト「ほ、本当に殺すぞ」

そして

ザガソ「わしを殺すとま」が一生超泣くよ。そして娘は超一生超ト
イラーの町を超恨んで暮らしていくよ」

ブルースは

ブルース「ザガソさん。貴方は本当に最悪の依頼人だ。」

ブロント「おじさつて本当はあのザガンか」

そしてザガンは

ザガン「そうだ。超奥深い奈落の果てでさまよつていたが人間に戻れたんだ。そして超優しい超最高の人間になると超決心したんだ。」

そしてそこへ桃木・斬が襲つてきた。

桃木・斬「ククク。俺様に勝てるかな」

シャーサク「ひとまず逃げよーー」

しかし水に包まれて出れなかつた。

シャーサクは隠れた。

リン「ずるいな。シャーサクも敵も」

そして桃木は

桃木「クックク、『水分身』」

桃木は近くの水で分身を作成した。

そして

リン「ボクも久し振りの登場『竜王君臨』」

リンの氣の力で竜王が出現した。

そして

竜王は桃木の分身を倒し桃木を襲つた。

桃木「くつ『アクアイシールド』」

ときすでに遅し。

桃木は龍によつてボロボロになつた。

ブルース「これほどの攻撃を受けたらリンはボロボロだな」

黒「僕の名は黒。」この犯罪者桃木を殺すチャンスをうかがつていた。

「

こいつは黒。謎の少年だ。

しかし、仮面をつけており、こいつらは確か、罪人を殺したりする人

とりあいす味方のはずだ

ザガン「超ありがとうございます」

第21話 桃木&黒VSスライル軍団

そして黒と桃木は

黒「本当は助けてあげました。」

そして桃木は

桃木「俺一人でもこれぐらい死なずに済んだと思つ」

黒は死んだと思った。

そして会話している時元ボスのスライルが現れた。

スライル「おじけ済んだな。『アクアートルネードラッシュジャー』」

水の力で黒と斬はボロボロ

スライル「ビルン様、ドルス様、貴方達もこの駄目野郎を倒してくれませんか。」

ビルン「いいよ。代わりにこの水魔法の隠し技を教えて」

その事でスライルはオッケーをもらつた。

スライル&ビルン&ドルスVS桃木&黒

桃木「ガーゴイル。いってよし

そしてガーゴイルが現れた。

ガーゴイル「殺す」

そしてドルスは

ドルス「鳥は氷技にはめっぽう弱い『アイスストリーム』」

ガーゴイルはたえた。

桃木「効果抜群ではなく超効果抜群だよ。だから氷をバリアする道具を容易したんだ。」

スライル「多分岩・鳥タイプだな『アクアストリーム』」

水にはガーゴイルは耐えられなかつた。

ガーゴイルは力尽きた。

桃木「俺のクロスチョップで殺してやるよ」

桃木はクロスチョップを放つた。

しかし攻撃は外れた。

ビルン「桃木は格闘系人間でもありか『サイケ光線』」

サイケの力の光線が桃木を襲つた。

黒「フフフ『氷鏡シールド』」

黒は氷鏡を操る少年だった。

サイケ光線はビルンに跳ね返った。

ビルン「自分たちの攻撃が特に強力な攻撃となる」

ダークライズ「闇の魔王だけど今日は正義の力で戦つてあげない。
逃げる」

何故か…

近くに散歩したダークライズは魔王の城に逃げた。

ドルス「デビルラッシュьюミラクル族の怒りの力を見せてやる…」

ドルスは闇の生物に変形した。

ヨダレで地面をおにぎりに変え。強力な体で地面を搖るがしあいしそうな尻尾の香りが田にしみる。

デビルミラクル族のにぎりとラッシュьюの力を持つ強力なデビルミラクル族だ。

ドルス「俺の本当の力を見せてやる」

ドルスは消えた。

黒「針で全体を滅ぼしてやる『魔氷・鏡針テンミリオン』」

1000万本の針が鏡で移り分裂しドルスとかまわり全体を襲う。

ドルス「ビルン。いつしょに戦おう」

ビルン「わかつた。『スライル投げ』」

スライルは黒に投げられ核を針でボロボロにされた。

スライルは死ぬ 一步手前になつた。

ビルンとドルスは逃げていったはずだ……

しかし

黒と桃木は見えない中ドルスやビルンに殺されていた。

第22話 魔王戦への第一歩

白蛇￥「お金半分軍団の襲撃だ」

シャーサク「ゾーマ軍をやつつけた事だし雑魚すぎだな￥が大文字
ならトノミコオノのアイコンになつたのに『ドーラーシャ連続召喚』」

ドーラーシャの集団が1匹のキラースネークを襲つた。

白蛇￥「ああああああああああああああああああああああああああ

その辺のプロント達は

ブルース「リンを運んでザガンが住んでいる町に着いた。」

リン「フフフ。ボクが用意した。プロントへ用意した針と缶。そしてアレだ。」

プロント「ひええええええええええええー」

プロントはリンから逃げた。

病気が治つたリンは

リン「ボクから逃げないで~」

そしてプロントは

プロント「いやです。刃物^{はやみ}で攻撃するシンからは逃げるしかない。」

その日小沢は死んだ。

そして・・・ザガン達は平和になつたが。

トイラーの町で異変が起きた。

プロント達はトイラーの町に向かつた・・・。

そこにはダークライズがモンスター軍と一緒に町を襲っていた。

しかし助かつた。

この後、プロントたちは魔王退治に旅をすることになる

第22話 魔王戦への第一歩（後書き）

これでプロントファイター第1部完です。

第2部は魔王退治の旅を描き、第3部がその後の魔物退治などをしていく物語となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5092c/>

プロントファイター

2010年10月9日13時45分発行